

Title	阿部次郎と感情移入美学
Sub Title	Jiro Abe and empathic aesthetics
Author	大石, 昌史(Oishi, Masashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.113 (2005. 3) ,p.93- 130
JaLC DOI	
Abstract	ABE Jiro (1883-1959) is famous for his philosophical essay titled (Diary of Santaro) (1914-18), and he is regarded as a representative of (Culturalism) of the Taisyo era in Japan. As was often the case with young intelligentsia of that period, he was interested in both Western and Eastern cultures and at the same time sincerely sought the way of living as a Japanese. He swayed between diversity of cultures and identity of his own personality. Abe wrote an (Aesthetics) in 1917, which is a selected and abridged translation of the empathic aesthetics of Theodor Lipps (1851-1914). Lipps developed his philosophy on the basis of the psychological principle of 'empathy'. Abe reconstructed the essence of Lipps' aesthetics mainly from the following books by him: Asthetik, Die ethischen Grundfragen, Leitfaden der Psychologic. Abe highly respected the personality of Lipps; later he published a book titled (Personalism) (1922), which is based on the ethics of Lipps and applies it to contemporary political problems. Despite his extensive and profound knowledge of aesthetics, Abe could not complete his own book on aesthetics. For, I think, empathic aesthetics is not a relative theory which can be replaced by another, but a kind of world view based on Personalism which regards a mere object as an irreplaceable personality. He called his standpoint in aesthetics 'aesthetics from inward', which includes aesthetic experience, expression, interpretation and moreover cultural philosophy, but empathy still remains in the center of his hypothetical aesthetics.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000113-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

阿部次郎と感情移入美学

— 大 石 昌 史* —

Jiro Abe and Empathic Aesthetics*Masashi Oishi*

ABE Jiro (1883–1959) is famous for his philosophical essay titled *Diary of Santaro* (1914–18), and he is regarded as a representative of *Culturalism* of the Taisyo era in Japan. As was often the case with young intelligentsia of that period, he was interested in both Western and Eastern cultures and at the same time sincerely sought the way of living as a Japanese. He swayed between diversity of cultures and identity of his own personality.

Abe wrote an *Aesthetics* in 1917, which is a selected and abridged translation of the empathic aesthetics of Theodor Lipps (1851–1914). Lipps developed his philosophy on the basis of the psychological principle of 'empathy'. Abe reconstructed the essence of Lipps' aesthetics mainly from the following books by him: *Ästhetik, Die ethischen Grundfragen, Leitfaden der Psychologie*. Abe highly respected the personality of Lipps; later he published a book titled *Personalism* (1922), which is based on the ethics of Lipps and applies it to contemporary political problems.

Despite his extensive and profound knowledge of aesthetics, Abe could not complete his own book on aesthetics. For, I think, empathic aesthetics is not a relative theory which can be replaced by another, but a kind of world view based on Personalism which regards a mere object as an irreplaceable personality. He called his standpoint in aesthetics 'aesthetics from inward', which includes aesthetic experience, expression, interpretation and moreover cultural philosophy, but empathy still remains in the center of his hypothetical aesthetics.

* 慶應義塾大学文学部助教授 (美学)

阿部次郎は、明治 16(1883)年 8 月 27 日、山形県^{あぐみ}飽海郡上郷村大字山寺に、小学校教員の阿部富太郎とお雪（竹岡氏の出）の次男として生まれた⁽¹⁾。明治 33 年 12 月校長排斥運動を起こした廉により山形中学を追われて上京、翌 34 年 1 月京北中学に転学し、6 月卒業、同年 9 月第一高等学校に入学した。一高時代には、同じ庄内出身の高山（林次郎）樗牛の死、藤村操の自殺に遭遇し、また文芸部委員として『交友會雑誌』の編集を担当し、自らも数多くの評論文を寄稿した。明治 37 年 9 月東京帝国大学文科大学哲学科に入学、明治 40 年 7 月卒業論文《スピノザの本體論》を以て同科を卒業した。東大時代には、明治 39 年 4 月から一年間『帝國文學』の編集委員を務め、卒業後は、夏目漱石が主宰する『東京朝日新聞』〈文藝欄〉（明治 42 年 11 月～44 年 10 月）に関わり、様々な評論・短文を寄稿した。明治 44 年 3 月、小宮豊隆・安部能成・森田草平らとの合著『影と声』に自らの評論を集めた〈彷徨〉を収めて春陽堂から刊行した。朝日文芸欄の廃止後は『讀賣新聞』の客員となった。そして、大正 3 (1914) 年 4 月には、「明治四十一年から大正三年正月に至るまで、およそ六年間にわたる自分の内面生活の最も直接的な記録」であり、「自分の悲哀から、憂愁から、希望から、失望から、自信から、羞恥から、憤激から、愛から、寂寥から、苦痛から促されて」書かれた文章（「自序」(1.13)⁽²⁾）を集めた『三太郎の日記』[第壹]⁽³⁾ が東雲堂から刊行された。翌 4 年 2 月には岩波書店から『三太郎の日記 第貳』が、さらに、大正 7 年 6 月には『合本 三太郎の日記』が岩波書店から、その後に書かれた同傾向の文章を集めて出版された。

1. 教養主義と人格主義

a. 『三太郎の日記』

阿部の『三太郎の日記』は、大正期の「教養」主義的傾向を典型的に示すものとされる⁽⁴⁾。三木清は、昭和 16(1941)年に書かれた〈読書遍歴〉

(『読書と人生』所収)のなかで、自らの体験した大正期の文化的・精神的傾向を以下のように回顧・規定している。「今私が直接に経験してきた限り当時の日本の精神界を回顧してみると、先ず冒険的で積極的な時代〔啓蒙主義〕があり、その時には学生の政治的関心も一般に強く、雄弁術などの流行を見た……が、次にその反動として内省的で懐疑的な時期が現われ、そしてそうした空気の中から〈教養〉という観念が我が国のインテリゲンチヤの間に現われたのである。従ってこの教養の観念はその由来からいって文学的乃至哲学的であって、政治的教養というものを含むことなく、むしろ意識的に政治的なものを外面的なものとして除外し排斥していたことができるであろう。教養の観念は主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々によって形成されていった。阿部次郎氏の『三太郎の日記』はその代表的な先駆で、私も寄宿寮の消燈後蠟燭の光で読み耽ったことがある」(新潮文庫版 p. 26 f.⁽⁵⁾)。

また、唐木順三は、昭和 24 年刊の『現代史への試み』において、文化史的・精神史的な「教養」概念を「古き形式が亡びつくし」た後の「それに代る新なる形式の未だ形成されていない間」、すなわち第一次世界大戦、ロシア革命後の大正 6, 7 年から第二次大戦後に至る三十年間を埋めている概念であると捉え、「教養は無形式である。無形式な教養が、形式、型、生活體系の代用として通用したといふ一種特異な時代が我々の生きて来た時代であつた」と回顧している(筑摩叢書版 p. 17⁽⁶⁾)。そして、唐木は、阿部の『三太郎の日記』に代表される、様々な古典を渉猟し自己の個性、内面に沈静する教養主義を以下のように批判的に性格づける⁽⁷⁾。「三太郎の自己優越感は〈あれもこれも [Sowohl-als auch]〉を公平に攝取する能力と態度」、「偏狹ではなく総合的に判断を下しうる世界人的自覺から來てゐる」(p. 41)。「〈あれもこれも〉に於ては對象になりえないものはない。基督も釋迦も、國家も民族も對象である」(p. 42)。しかし、その一方で「對象化しえない究極のもの」として、「個性〔可能性としての個

性]」と「包摂しきれない普遍」とを置く (ibid.). 「三太郎は心理研究者、観察者としては対象に対する優越的位置に立つ」が、「研究、観察の対象になりえない個性と普遍に対して [は] 憧憬を感じる. 対象化しきれないことから来る無気味さのために、或時は絶望したり、或時は恐怖したり、或時は救済を求めたりする. 〈内面的生活〉とか〈内生〉とかいつてゐるのがそれである」 (ibid.). 「教養派は内面的生活、内生に閉ちこもる. それは二重の意味に於て外面的なもの、外面生活を主問題としない. ……問題は個性と普遍、自我と神にある」 (p. 45).

b. 美学研究

東西を問わぬ多様な文化に対する「教養」主義的な関心と、「個性と普遍」とをめぐる「内省的」な態度とが、阿部を、内面の発露、個性の発現であるところの多様な芸術現象についてその普遍的な原理を探求する「美学」の研究へと導いた⁽⁸⁾. 『三太郎の日記』に収められた哲学的随想が執筆されていた時期に、阿部は、『大日本百科辞書』の一環として同文館から刊行された『哲学大辞書』(明治 42~45 年)における美学に関する主要項目を担当執筆している⁽⁹⁾. 阿部が担当した諸項目は、以下のように分類できる.

- a) 美学の諸傾向: 「美学史」, 「思辯的美学」, 「社会学的美学」, 「感情美学」
- b) 美の類型: 「自然美」, 「艺术美」, 「类美 [類型美]」, 「个体美」, 「滑稽」, 「机智」, 「兴致 (das Interessante)」, 「娇美 (the charming, das Reizende)」
- c) 艺术様式: 「象征主义」⁽¹⁰⁾, 「古典主义」, 「浪漫主义」
- d) 艺术衝動: 「艺术衝動」, 「形式衝動」, 「材料衝動」
- e) その他の美学・艺术学上の基本概念: 「真」, 「理想」, 「形像」, 「空想的」, 「美的判断」, 「美的標準」, 「美的興味」, 「合律性」, 「唯理論」,

「利用」

各項目には本文中および文末に数多くの参考文献が挙げられており、諸項目を配置し直すだけで十分に一冊の美学書となると思われるほどの充実ぶりである。実際、井上政次によれば、「大正二年一月三十日付の讀賣新聞は、その〈よみうり抄〉の欄に、〈阿部次郎氏の美學の著述は三月をもつて内田老鶴圃より出版することとなれり〉」と伝えている(17.580)⁽¹¹⁾。また、阿部次郎の自筆メモである〈年譜ノート〉の「[明治]四十三年」の項には、「哲學大辭書美學の部の大半分擔 / 菅原教造の周旋により美學の著述を計劃す / 内田老鶴圃より月俸（無成績）」（/ は改行を示す）とある(17.516)。

阿部のこの時点での美学研究の範囲ならびに水準については、彼が執筆したなかで最大の分量をもつ〈美學史〉項目(17.339-360)の以下のような内容・構成からうかがうことができる（（ ）内は阿部自身による小見出し、あるいは、論者による内容紹介）。

- 一 問題方法及著述（美学史研究の対象：組織的美学説・各時代の社会生活に現れた美的活動・趣味を形成する美的態度の傾向，美学史の文献）
- 二 希臘の美學（プラトン，アリストテレス，他）
- 三 希臘羅馬時代の美學（キケロ，伝ロンギノス，プルタルコス，プロティノス，他）
- 四 中世の美學（アウグティヌス，トマス・アキナス，他）
- 五 十七八世紀の美學（フランス，イギリス，ドイツに分けて多くの理論家に言及）
- 六 カントの美學
- 七 カント以後の哲學的美學（シラー，シェリング，ヘーゲルからハルトマン，キルヒマン，フェヒナーに至るまでの展開）
- 八 現代の美學（方法：社会学的美学と心理学的美学，問題：美的玩賞・芸術的製作・芸術学に即して多くの理論家に言及）

九 日本に於ける美學思想（明治期の西洋美学研究の状況⁽¹²⁾，美学をめぐる論争⁽¹³⁾，諸大学の美学講座⁽¹⁴⁾について紹介）

このような美学に関する該博な知識の蓄積があったにも拘わらず，阿部が大正6年4月に公刊した『美學』（《岩波哲學叢書》第九編⁽¹⁵⁾）は，テオドア・リップス⁽¹⁶⁾の著作の内容を抄訳・祖述したものとなった。「感情移入」を原理としたリップスの美学については後に検討するが，阿部は，大正2年から慶應義塾大学で，大正6年からは日本女子大学校で美学，文芸論を講じており，大正11年5月から文部省在外研究員として美学研究のため欧州（英・独・伊）に留学した後，大正12年10月東北帝国大学法文学部美学講座担当教授に就任している。

c. 『人格主義』

阿部は、『美學』の公刊に先立つ大正5年7月に，同じく《岩波哲學叢書》の第六編として，リップスの『倫理學の根本問題 (Die ethischen Grundfragen)』（1899年初版）を抄訳している⁽¹⁷⁾。阿部はこの書に付された〈凡例〉のなかで，リップスについて，「この人は現代の哲學者中自分に最も多く思想上の影響を與へた人である。もし同時代の先輩中自分が最も多く思想上の感化を受けた人を〈師〉と呼ぶものとすれば，リップスはまさしく自分の哲學上の〈師〉である」（3.7）〔下線は原著では傍点（以下同様）〕。「リップスは現代の學者中世界を通じて恐らく第一流の人格である」（3.8）。「もしこの人が歐羅巴の學生に及ぼした人格的感化の一端が，自分の微弱なる通譯を通じて日本の思想界の一部にでも波及するならば——混亂せる概念を整理し，昏睡せる良心を喚びさまし，ひとむきな物質的功利的打算を驅逐し，人格の威嚴と崇高とに對する情熱を喚起する一助ともなるならば，それはひとり自分の喜びのみにとゞまらないであらう」（ibid.）と，彼に対する敬意を情熱的に表明している⁽¹⁸⁾。

このようなリップスの主張・態度を基に，阿部は，大正9年春に満鐵

讀書會の招きに応じて『人格主義の思潮』（満鐵讀書會，大正10年6月刊）⁽¹⁹⁾と題する講演を行い，そこで述べられた思想を個々に発展させ応用する形で書かれた諸論文を集めて，大正11年6月，岩波書店から『人格主義』⁽²⁰⁾と題して出版した．この『人格主義』は「故テオドール・リップス先生に獻ぐ」と献辞が付されており，その〈序〉では「私はリップスの『倫理學の根本問題』に對する補説としてこの書を書いた．……リップスの倫理學を縮譯してからこのかた，私はこの書の精神をひろめることを，今日の社會に對する自分の義務と感じて來た」(6.7)と述べられている．

阿部によれば，「人格主義」は一種の「理想主義」であり，理想主義は「理想を指導原理としてあらゆる思想と生活とを律して行かうとする主義」(6.16)である．そして，人格主義とは「少なくとも人間の生活に關する限り，人格の成長と發展とをもつて至上の價值となし，この第一義の価値との聯關において，他のあらゆる價值の意義と等級とを定めて行かうとするもの」(6.48)である．それでは，その成長と發展とが至上の価値とされる「人格」とはいかなるものと捉えられるのか．阿部は，人格の概念について四つ「標識」をあげている．「第一に人格は物と區別せられるところにその意味を持つてゐる」(6.48)．「物の價值は精神によつて始めて與へられる．精神の要求を無視して物の價值を云為するは本來無意味である．さうして人格とはこの精神であり價值と意味との主であるところのものに名づけた名であつて，その對象たるにとゞまるところの物はこれに對立する」(6.49 f.)⁽²¹⁾．「第二に人格は個々の意識的經驗の總和ではなくて，その底流をなしてこれを支持しこれを統一するところの自我である．第三に人格はわかつべからざるものといふ意味においての Individuum（個體）である．一つの不可分な生命である．第四に人格は先驗的要素を内容としてゐる意味において後天的性格と區別される．カントの言葉を用ゐればそれは單純な經驗的性格ではなくて叡智的性格を含んでゐるところにその特

質を持つてゐるのである」(6.48 f.).

このような精神、自我、個体、叡智的存在としての人格は、リップスに従って「豊富」、「力」、「統一」の三つの要素によって、その価値が認められる⁽²²⁾。「第一に人格の豊富はそれ自身において人格価値の一面である。他の点における比較はどうであつても、とにかく豊富に生きることを解する人格は、貧弱な人格よりも、少なくともその限りにおいて優れてゐる。第二に人格の力もそれ自身において人格価値の一面である。力ある人格は力なき人格よりも、少なくともこの一点においては勝つてゐる。第三に人格の統一はその人格の高さを決定する。釋迦や孔子もその精神分析においては煩惱具足の凡夫であるにもせよ、彼らの生活が道を中心とする点において、彼らは貪色の奴隸よりも遙かに高い人格を持つてゐるといはなければならない。われわれが眞正に人となるとは、この三要素のいずれをも偏廢せずに、全局に渡つて人格の価値を増進することである」(6.75)。しかし、豊かさ、力、高さによって人格がその価値を認められるということは、多様性と統一性とを力によって均衡せしめるという矛盾を孕む要求を含んでおり、人格は、その実体的・固定的な在り方というよりは、むしろ向上を目指して努力する姿勢において評価される。それは、自我の根底に存すると同時に努力目標としての理念的存在なのである。

『人格主義』が出版された大正 11(1922) 年は、大逆事件 (明治 43 年)、友愛会の創立 (大正元年)、第一次世界大戦 (大正 3~7 年)、民本主義の提唱 (大正 5 年)、ロシア革命 (大正 6 年)、米騒動 (大正 7 年)、戦後恐慌 (大正 9 年~)、日本社会主義同盟の結成 (同年) 等を経て、「労働運動 (無政府主義・共産主義)」⁽²³⁾ の高まりとともに「国家主義」⁽²⁴⁾ の台頭が見られた。このような政治・社会情勢に対して、阿部は、資本主義と共産主義とに共通する物質主義に対して、個人としての理想を希求する人格主義こそが社会を向上させる道だと主張し、民主主義も、もしそれが「輿論もしくは多数決の絶対權威によつて個人の屈從を強要する制度」

(6.118)であるならば、それは「變形せる専制主義」(ibid.)に過ぎないとする。阿部にとって人格主義の社会とは、「すべての人が……その良心に従って生活することを保証される社会である。又すべての人が……自己の人格を育てたり伸ばしたりする機会を、それぞれの才能に應じて與へられる社会である。偉大な者からその大きさ奪ふことによつて、團栗として平等な人を造らうとする社会ではなくて、あらゆる人が最高の程度にその人格を伸ばす権利を平等に保証する社会である。約言すれば、あらゆる人を……自由な人格を持つ者として平等に取り扱ふ社会である」(6.119)。そして国家は、このような社会を実現するための法的強制力を持った民族的単位であり(cf. 6.149)、国家に、その内なる国民に対しても外なる他国に対しても「道義的偉大」を求める者こそが「真正の愛國者」なのである(6.148)。

大正期の「教養」主義の代表者とみなされる阿部次郎が、当時の社会問題に対してとった態度がこのような「人格主義」の主張であり、それは彼が単なる「内省」の人ではなかったことを示している。阿部は、『人格主義』の冒頭で、「現實の生活は、世界の組織かわれわれの觀照の態度か、内外いづれかの方面に缺陷があることを原則」としており、「理想主義の現實生活における適用には、何らかの意味における戦があるのが普通」であり、「この意味において……理想主義の生活は戦の生活である」(6.16)と述べている。しかし、その「戦」は、人格の陶冶を目指す内向きの戦いにとどまり、直接外なる社会制度の改革に向かうものとはならなかった。それは、人格主義は労働者と資本家との「血腥き階級闘争の戦場においては赤十字」となる(6.82)という言明にも示されている⁽²⁵⁾。理想主義としての人格主義は、現実的な制度改革の主張とはなり得ず、志操の問題として観念論的な人道主義にとどまっている。しかし、見方を変えれば、むしろそれ故にこそ、「闘争後の新しき建設においては必ずこの精神に従はなければならぬところの永遠の原理」(ibid.)として、いかなる政治・社会体

制の下でも絶えず主張されるべき普遍的な意義を有しているとも言えよう。

2. 感情移入美学

a. リップス『美学』の祖述

岩波書店の《哲学叢書》の第九編として大正6(1917)年4月に刊行された『美學』は、同じくこの叢書に属する前著『倫理學の根本問題』と同様に、リップスの同名の著作を抄訳したものである。

阿部はリップス『美学』抄訳の方針について、〈凡例〉のなかで以下のように記している。「自分はリップスの感情移入説の立場に據つて本書を書いた。特にその Aesthetik. [Psychologie des Schönen und der Kunst], 2 Bde. [『美学』]⁽²⁶⁾. Leitfaden der Psychologie [『心理学原論』]⁽²⁷⁾. Die ethischen Grundfragen [以下の対応表では『倫理学』と略称]. Aesthetik (Kultur der Gegenwart)⁽²⁸⁾. の四書は本書の基礎となつてゐるものである。しかし自分が本書において目的としたところは、リップスの美學説の紹介ではなくて、リップスの根本觀念に従つて、自ら美學の諸問題を考察することであつた。ゆゑに自分は自分の言葉がリップスの言葉に接近しすぎることを恐れないと同様に、リップスの言葉に遠ざかりすぎることをもまた憚らなかつた。自分は時として自分の中の問題となるまゝに、リップスの觸れなかつた問題に觸れたり、個々の問題について意識してリップスの見解を訂正したりした。もし本書の考察がその内部に矛盾を含んでゐるとすれば——その見解が全體として統一を缺いてゐるとすれば、それはすべて自分の責任である。自分はこゝに明らかに、自分のあやまちをリップスの責に歸せぬやうに讀者諸君に請ひたい」(3.235)。

このような態度に基づいて祖述された『美學』は、以下のように構成されている。なお()内は、上に挙げられた諸著との対応を示している。

第一章 序論——美的價值

第一節 美學 (←『美学』序論)

第二節 感情 (←『美学』第I部第1篇第1章,『心理学原論』第19・20章)

第三節 價值 (←『心理学原論』第21章)

第四節 美的價值 (←『美学』第I部第2篇第5章)

第二章 美的形式原理

第一節 多様の統一 (←『美学』第I部第1篇第3章)

第二節 通相分化の原理 (←『美学』第I部第1篇第3章)

第三節 君主制的從屬の原理 (←『美学』第I部第1篇第4章)

第三章 美的感情移入

第一節 感情移入の概念及び種類 (←『美学』第I部第2篇第1～9章,『心理学原論』第12章,『倫理学』第1章)

第二節 美と醜 (←『美学』第I部第6篇第9章)

第四章 美の諸相

第一節 量的感情——崇高と優美 (←『美学』第I部第6篇第1～4章)

第二節 混合感情——悲壯とフモール (←『美学』第I部第6篇第7・8章)

第五章 美的觀照と藝術

第一節 美的觀照 (←『美学』第II部第1篇第2章)

第二節 藝術 (←『美学』第II部第1篇第3・4章)

第三節 美と人生 (← cf.『倫理学』第7章)

餘論——殘されたる問題⁽²⁹⁾

索引兼譯語對照表 [単行本のみ]

以上のような対応関係が示すように、阿部の『美學』は、美学の一般理論を概説する構成をとりつつ、リップスの『美学』(第一部が中心)から原理的な主張を抽出し、その主要概念の説明については他の著作も援用しながら、感情移入美学の精髓を述べたものである。阿部が抽出したリップ

ス美学の基本主張は、心理学的な感情移入の原理、心理作用と相関する美的な形式原理、感情移入に基づく美の諸相の説明として、(『倫理學の根本問題』(3.5-276)における主張も補いながら) 以下のようにまとめることができる⁽³⁰⁾。

リップスによれば、「感情移入」は以下のように分類される (3.331 ff.)。意識による対象の「統覚」作用に際して行われる「一般的統覺的感情移入 (allgemeine apperzeptive Einfühlung)」は、原理的ではあるが「抽象的」なものにとどまり、言わば特定の内容を持った感情移入が行われるための「容器」となる (3.336)。「情調移入 (Stimmungseinfühlung)」は、対象に対して漠然とした気分を移入してそれを有情化することであるが、これは主に自然の風景、色や音に対して行われる。より具体的な「對自然感情移入 (Natureinfühlung)」においては、「一般的統覺的感情移入」のみならず、「[因果律などの] 經驗的要素に制約されたる統覺的感情移入 (empirisch bedingte apperzeptive Einfühlung)」が働いて、自然の様々な統一的対象が生あるもの、特定の内容を持ったものとして現れる。また、内面と連関する声音や表情等の「人間の官能的現象に對する感情移入 (Einfühlung in die sinnliche Erscheinung des Menschen)」を通じて、初めて人は他者の精神生活について知ることが可能となる。さらに、感情移入は、直接的な印象にのみ依存する「美的感情移入」と対象の現実的なあり方に関わる「實踐的感情移入」とに区別される (3.24)。美的感情移入は、純粹な「美的觀照 (aesthetische Betrachtung)」を前提とするが (3.26)、この美的觀照を通じて対象は、独特な「觀念性 (Idealität)」「分離性 (Isoliertheit)」「客觀性 (Objektivität)」「實在性 (Realität)」「深 (Tiefe)」を伴うものとして現象する (3.415 ff.)。リップスの感情移入美学の特徴は、とりわけ、觀照者は感情移入によって美的対象の深いところに「人格」を発見するとされる「美的深」の規定に表れている。

ところで、リップスによれば、「美的に價值あるもの」は我々に「快感」

を与えるものであるが(3.243),「統覺(Apperzeption)」作用において捉えられる人間の心の本性は「統一」にあり,対象に「質的歸一性[統一性](qualitative Einheitlichkeit)」が認められるとき,心のうちに美的快感が生じる(3.287 f.). この質的統一性を示す「美的形式原理」が「多様の統一(Einheit in der Mannigfaltigkeit)」であり(3.291 f.),さらにこの原理は「通相分化の原理(Prinzip der Differenzierung eines Gemeinsamen)」と「君主制的從屬の原理(Prinzip der monarchischen Unterordnung)」とに区別される. 前者は,すべての部分に何らかの「通相[共通性]」が認められ,全体がその各部分に「分化」したものと現れる場合(3.298 f.)であり,後者は,共通性を前提としつつも,全体のなかのある特定の部分が他の諸部分を圧倒し服従させている場合である(3.308/310).

また,リップスは,美の様々な様態,美的範疇について,感情移入の立場から説明する. 対象に対する肯定的な感情移入は「積極的(positiv)感情移入」と呼ばれ,これに対して対象が觀照者の内面の「生」を「否定」するように感じさせる場合にはそれを「消極的(negativ)感情移入」と呼ぶ(3.355 f.). 積極的感情移入の対象が「美的同情(Sympathie)」(3.362)としての快感を惹き起こすところの「美」であり,消極的な感情移入の対象が「美的反情(Antipathie)」(3.363)としての不快感を惹き起こすところの「醜」である. このように美醜を感情移入に基づいて区別した上で,「量的感情(Quantitätsgefühl)」としての「崇高」と「優美」とが,前者は「生及び生の可能」の領域に属し(3.379 f.),後者は他から妨げられずに「[自己の] 生を遂げること(Sichausleben)」すなわち自己充足の領域にあるもの(3.387)と規定される. さらに,快と不快との「混合感情(Mischgefühl)」(3.390)としての「悲壯」と「フモール」とが,悲壯は人間的価値の印象が「苦惱(Leiden)」によってかえって一層高められるところに成立する一種の崇高であり(3.397),フモールはそれが「滑稽」なものに

よって否定されるためにかえって一層強められるところに感じられる崇高である (3.405/407) と説明される。リップスにおいて「崇高」は、「人格的偉大」に基づく「深さ」として意識され (3.377 ff.), そこにおいて倫理と美とが融合する感情として積極的に評価される。

以上のように、リップスは「感情移入」を、意識における統覚作用と対象における統一性との間の相関において説明する。すなわち感情移入は、主観的規定と客観的規定との相互依存、あるいは自己と対象との間の「生」の循環のうちに位置づけられる。このような感情移入は、その構造が本質的に有するところの循環性の故に、認識論的には無意味なものとなりかねない。はたして、このような難点を孕む感情移入美学に積極的な意義が認められるであろうか。それを明らかにするために、以下では、リップスが主張する「美的感情移入」について、『倫理學の根本問題』における規定とも合わせて、より詳細な検討を試みる。

b. 美的感情移入

阿部の抄訳するところに従えば、「美的感情移入」およびそれと連関する概念について、リップスは、以下のような形でその意義を主張している。「美的感情移入が実践上動機を與へる力を持つてゐないといふ事實は、一面においてその缺點たると同時に一面においては却つてその長所である。それは美的感情移入の態度——美的觀照——は現實非現實の問題に煩さることなきがゆゑに、自ら又現實的利害の範圍から全然脱却してゐるからである」(3.26)。「倫理的觀照がすべての價值を他の價值との聯關において見むとするに對して、美的觀照はすべての價值をそれ自身において見るといふことである」(3.283)。「倫理的觀照とは、換言すれば絶對理想に照して個々の心情や意志を評價する態度である。したがつてこの觀照は常により高き善を追求する實行的態度を喚起する。觀照が觀照にとゞまるを得ずして自己を止揚(アウフヘーベン)するところに、倫理的態度の真正の本

質がある」(3.284). これに対して「美的態度は感情移入と共に始終する態度である. それは完全なる感情移入 (volle Einfühlung) の態度である. さうして完全なる感情移入は美的觀照以外においてはどこにも行はれない」(3.285). 「美的受用 (美的翫賞 aesthetischer Genuss)」はすべて美的感情移入に基づき, あらゆる利他的感情や利他的動機はすべて実践的感情移入に基づく」(3.25). 「美的受用において, 人は人體や風景や建築の形状や音樂の音響や節奏は愚か, 單なる線や色の中にさへ自分自身の人格の感動を移し入れる. 人はかくのごとくにしてあらゆる物象に魂を與へる. 魂を與へられることによつてこれらの物象は初めて自分にとって美となるのである. 畢竟美の感情とは客觀化せられた自己受用 (Selbstgenuss) である. 美的感情移入において, 人は外物の中に——外界の一點において——直接におのれ自らを體驗する」(ibid.).

このような態度と相關する対象の「美的價值」については, 以下のように述べられている. 「美的價值は物象固有の價值である」と「云ふのは, それが物象の物象としての價值であるといふ意味ではない. 我らの美的態度によつて, 物象は單純なる感覺的存在ではなくて, 一つの世界を——感情を, 心を, 生命を表出する象徴 (Symbol) である. 物象はこの世界の象徴として始めてその美的價值を獲得する. 美なるものはもとより物象である. しかし物象を美にする所以は, 物象が物象として我らに與ふる官能的快感ではなくて, 物象の中に表出される〈生命〉である, 〈心〉である. ゆゑに我らは, 美的價值を擔ふ対象は物象であるが, 美的價值の内容は対象の中に表出さるる心的生命の價值——換言すれば人格價值であるといふことが出來よう」(3.275). 美的態度と相關する「美的價值」の内容が, 心的生命の価値としての「人格價值」であると規定されることによって, リップスの美学は, その言わば「人格主義の美学」としての性格を顕わとする. 形式論理的には難点を孕む「美的感情移入」の概念は, 美と倫理との融合を通じた人格の自己陶冶を説く一種の人間学的哲学の中心概念とし

て捉えられてこそ、積極的な意義を有する。

c. 人格主義の美学

リップスによれば、「人格価値」は「根本価値」、「最も固有の意味における価値」である(3.259)。それに対して「單に快感を與ふるにすぎざる対象もしくは事態」は、「宜しさ (Annehmlichkeit)」と名づけて価値と対立せしめるべきものである(ibid.)。「対象の価値は要するにその対象が我らの中に喚起する内面的態度の価値によつて定まる」のであり、「対象の要求する内面的態度が我らの人格全體の生活欲求と合致するかしないか——これが一切の対象の価値を定むる究竟の標準である」(ibid.)。「人格価値とは我らの積極的人格感情 (Persönlichkeitsgefühl) の対象となる一切の内面的態度の性質である。あらゆる内面的活動は、それが我らの全人格を積極的に生かす程度に従つて無條件に価値を保有する。これに反して我らの幸福や快樂は、そこに人格価値が表現されてある限りにおいて価値を分有する條件的価値である。さうしてあらゆる官能的対象——換言すれば物象もまた我らの人格内に価値ある活動を喚起する限りにおいて條件的に価値を持っているのみである」(3.261)。

人格価値が価値の根本をなすものである以上、それは必然的に「善」である。然るに、人格価値が美的価値の内容である以上、美と善とは必然的に關係する。「我らはあらゆる人格的価値を〈善〉と名づける。ゆゑに美的価値の内容は常に〈善〉であるといふこともまた出来るのである。すべての物象は、それが善を表出してゐる限りにおいて美である。さうして悪を表出してゐる限りにおいてそれは常に醜である。換言すれば、美とは物象の中に表出された善である。醜とは物象の中に表出された悪である。かくて我らはこゝに善悪と美醜との——したがつて又倫理学と美学との極めて密接なる聯關を發見するのである」(3.276)。しかし、「いかにして善は美の内容となることが出来るか。美とは物象の価値である。物象とは感覺

的存在である。我らは物象について、たゞその色と形とを見、その音を聴き、その面に觸れ、その臭ひを嗅ぎ、その味を味はふことが出来るばかりである。かくのごとき物象がいかにして生命の象徴となることが出来るか、いかにして善を表出することが出来るか」(3.281)。それこそまさに「感情移入」を通じてである。「我らが直接に経験することが出来るのはたゞ自己の生命、自己の活動、自己の感情のみである。ゆゑに我らが演劇を見詩を読み自然に對するとき、そこに發見する悲哀や歡喜や憂愁や恍惚も、それが單なる表象にとゞまらずして眞實の體驗である限り、それは我ら自身の経験でなければならぬ。しかも我らはこれを我らの視聽の對象と結合して、對象自身が悲哀や歡喜や憂愁や恍惚を感じてゐるやうに思ふのである。かくのごとくにして物象は始めて有情化される。かくのごとくにしてそれは始めて生命の象徴となる。この途によつて善は始めて美の内容となることが出来るのである。さうして善を表出することによつて對象は始めて美となるのである。ゆゑに美的價值は又感情移入價值(Einfühlungswert)である」(ibid.)。それ故に、また「藝術の眞正なる内容」も「人格的生命」でなければならず、「我らは藝術品の——一般に美の——享樂によつて、單に表皮の一部分を刺戟さるるにとゞまらず、多かれ少なかれ本質の根柢をつかまれることを感ずる。多かれ少なかれ全人格がこれによつて生きることを感ずる。こゝにそれを單なる官能の享樂以上に高め、根本的にこれと區別する所以があるのである」(3.153)。「同時に我らは美及び藝術によつて自己以上に高められる。我らが美なるもの及び藝術品の中に移入するのは日常現實の自己ではなくて、更に純粹な、更に廣闊な、更に高い自己である。一切の美は少なくとも觀照の瞬間において、我らを一層よき、一層十分な——したがつて一層道德的な人間にする」(3.153 f.)。

このように感情移入美学は、人格との相關において、独特な倫理的人間学的な意義を有する⁽³¹⁾。阿部は、著者リップス自身の高潔な人格と並んで、彼の感情移入美学のこのような倫理的性格に注目する。その結果、彼

にとって感情移入美学は、論理的な難点を孕みながらも他の美学理論と対比され相対化されるようなものではなく、「人格主義の美学」として特別な位置を占める。彼において人格主義と感情移入美学とは不可分の関係にあり、感情移入の美学は、主観と客観との相関において、自己の人格を対象のうちに生き生きと見出すところの自己確認、さらには、対象のうちに純粹化され高められた自己の姿を見るところの自己陶冶の美学として捉えられる。

3. 内からの美学

a. 美学の様々な立場

岩波哲學叢書の『美學』は、大正12年の関東大震災によって紙型を消失したため、大正13年わずかな改変・増補を伴って改版された。そして、第二次大戦後の昭和25年には、出版社を勁草書房に代えて再刊され、この際〈再刊序言〉が付加された⁽³²⁾。阿部は、この〈再刊序言〉のなかで、感情移入美学に基づく旧著の意義について以下のように述べている。「本書は岩波書店の〈哲學叢書〉の第九篇として大正六年四月に刊行されたものである。……この書の出版は今を去ることまさに三十三年である。このやうな舊著を再び世に送ることに何の意義があるか。……この書の説くところは舊美學である。私見をもつてすれば不當に世間から忘れられつゝある感情移入美學である。しかしそれが唯一の美學ではないまでも（現在の私も、それが唯一の美學だとは信じてゐない）いまだ忘れ去るを許されぬ眞理を含んでゐること、こゝに含まれてゐる眞理を顧慮の外に置くことが現代美學の一つの缺陷となること——このことを想起せしめるために、本書はなほ存在の理由を持つてゐると、今の私は信ずるのである」(3.219 f.).

「未だ忘れ去るを許されぬ眞理」を含む感情移入美学を説明するために、阿部は、美学研究における様々な立場を以下のようにまとめている。「周

知のごとくフェヒナーは美學を〈上から〉(von oben)の美學と〈下から〉(von unten)の美學に區別し、自らは下からの美學の途を採ることを宣言してその實現に努力した」(3.226). ヘーゲルやフリードリヒ・フィッシャーなどに代表される形而上学的な「上からの美學」に対抗する「下からの美學」は、「フェヒナー流の實驗的統計的美學では満足せずに、美的經驗の内部構造を問題にすることによって次第に内へ迫って來る方向をとった。一般に心理的美學と名づけられるものがこれに屬する。感情移入美學もまた、それが説明的心理学の基礎構築(Substruktion)を要求する限り、その一分派と名づけられることを妨げないであらう。それは美的體驗の内部構造をその心理的基礎に還元して説明せむとする點において下からの（換言すれば心理的根柢からの）支持を必要とするのである」(3.227). このような「下から築き上げようとする努力に對して、又これを背後から(von hinten)説明しようとする努力は區別されなければならぬ」(ibid.). このような「背後からの美學」が「唯物論的美學及び精神分析學的美學」であり、「兩者はその所依とする他學を異にしつゝ、彼らの根原視する潜在意識的若くは社會經濟的背景に繋げて、美的體驗と藝術とを説明し去らうとする點において一様に背後からの美學に屬するのである」(ibid.).

b. 内からの美學の基礎づけ

美學の様々な可能的立場のなかからリップスの感情移入美学に對して関心を持ち、その意義を認め続けたのは、阿部自身が美学に對してその「内からの基礎づけ」を求めていたからである。「内からの(von innen heraus)」とは「ゲーテが特愛して隨所に繰り返し用ゐてゐる言葉」であるが、阿部は「このゲーテ的世界體驗の態度」を「美學的考察の方法としても生かすことを心掛けた」(3.225). そして、「もし事情が許すならば……私は内からの美學の基礎を置きたかつた」(ibid.)のだと語っている。「一切の美學的方法の對立は〈内から〉と〈外から〉(von aussen)との對

立の方が根本的で、上からと云ひ下からといふもまた外からの一種にすぎないのではないか。……私見によれば、あらゆる外からの美学は、この内からの美学の基礎がなければ常に浮動して他の文化諸學に寄食する外に存立の地を見出し得ないのである」(3.226)。「美学の中心問題」は「美的體驗の本質及び内部構造の問題」である。「[下からの美学が主張する美的體驗の] 心理的基礎の問題は主として心理学の問題であつて、美の問題はまづ意識體驗の特殊領域として内から記述分析綜合せられなければならぬ。[背後からの美学が主張する] 經濟や潜在意識の問題は条件としてそれ自身重大な問題であるが、いかに重大でも条件はつひに条件である。本質の問題を解かずに条件の問題に没頭するとき、それは条件の重さに押されて本質の直観に錯誤を生ずるであらう。[上からの美学が主張する] 美的體驗の宗教的形而上學的位置は、最後に全文化の綜合において問題となり得る。しかしそれは美的體驗の本質の理解を前提とする。それをせずに神もしくは第一原理から美や藝術を演繹せむとすると、フェヒナーの云ふやうに、粘土の足を持つ巨像のごとく倒れるであらう。まづ内からの美学へ！ この意味で私は内からの美学の中心的位置を主張するのである」(3.227 f.).

リップスは、「感覺、知覺、表象、概念と煉瓦のやうに下から部分を積み上げて行かうとする要素的心理學」に対して「統覺、體驗、努力等の中樞的作用」に心理学の「重點」を置き換え、「綜合統一の力を眼目として意識生活の全景觀を組織せむとする」(3.232 f.). 「しかしもし美学が心理学に基礎を求めるにしても、これに適する心理学はリップスの意味する〈記述的説明的心理學〉であらうか」と阿部は問う(3.233). リップスは、彼の論文〈我思故我在 (Das “cogito ergo sum”)〉(1912年)⁽³³⁾ が示すやうに「記述と説明との差別を明瞭に意識しながら、しかもなほ〈記述的説明的心理學〉と一氣に呼ぶことを避けなかつた。我々はディルタイがその生涯のある時期にその精神科學の基礎を心理学に求めようとしたことを知

つてゐる。そのとき彼の考へたのは〈記述的分析的心理學〉(die beschreibende und zergliedernde Psychologie)であつた」(ibid.). 果たして「兩者のいずれがより妥當であるか、あるひは兩者のいずれも不充分で、我々は他に〈文化の體系〉といふやうな基礎概念を求むべきであるか」(ibid.). 阿部は、このように問うだけで、美学に対して心理学が、心理現象の全体像を「記述」することにおいてその「基礎学」となり得るのか、それだけでは足りず、自然科学と同様に「法則」に基づいた因果的な「説明」をも必要とするのか、これに対して明確には答えない⁽³⁴⁾。しかし、「内からの美学」に定位した彼の関心は、基礎学としての心理学のあり方から離れて、内なるものの外化としての「歴史」や「文化」へと向かい、そのような文脈においてディルタイはより重要な位置を占めることになった⁽³⁵⁾。

c. 文化哲学への広がり

阿部は、リップスからディルタイへと移行した彼の「内からの美学」に対する関心の推移を以下のように述べている。「リップスにおいては表面に浮ぶこと少き歴史への關心がこの人〔ディルタイ〕によって開發された。さうして私の内からの美學への志向がこの歴史的關心を是認したのである。Von innen heraus とは、單純に内の美學 (Aesthetik von innen) といふ意味ではない。又内に向ふ (nach innen) 美學といふ意味でもない。それは von innen heraus である、内發して外に及ぶのである、體驗が表出になるのである。體驗が表出として迸り出ること、表出に即して體驗を遂げること——これが、制作と鑑賞の兩者を貫いて美といふ文化活動の本質である。ゆゑに内からの美學は、具體的歴史的所産としての多くの藝術品の理解を蓄積して、これを類型化しつゝ體系的に美の概念に到達しなければならぬ」(3.228 f.).

阿部が主張する「内からの美学」は、それが本質的に「内から外へ」の

方位を有するが故に、ある点では「依然として感情移入美学を踏襲しながら、他のある点においてはこれと異なる方向をとるに至った」(3.229). 内からの美学もまた「〈表現〉(Darstellung)の問題を重視する。むしろ感情移入美学よりもこの概念をより多く重視して、これを制作と鑑賞の両者にわたる考察の出発点に据える。いはゆる藝術美もいはゆる自然美も、共に特殊なる表現體の資格において美学の問題となるのである。さうしてそれが表現體となるのは、官能の對象が精神的意義の容器として新存在を獲得するからである。したがって〈象徴〉の問題が〈表現〉の問題に次いで來なければならぬ。これらの點で我々は感情移入美学に多くの問題を學び續ける必要があるであらう。しかしこゝまで來て兩者の途は次第に別れる。感情移入美学はこゝから〈母たちの國〉(『ファウスト』⁽³⁶⁾)へ沈んで意識構造の根本相の上に美學的洞察の基礎を築き上げむとする。それはリップスの意味における説明心理學的作業である。しかし我々はこの作業を心理學に一任して(もとよりそれが不可能だとも無用だとも云ふのではない)、いはば文化哲學的作業に進入する。感情移入美学において、崇高とか優美とか悲壯とか滑稽とかを問題とする〈美の諸相〉の章に相當するものとして我々は〈様式論〉(Stilistik)を問題とするのである。具體的文化所産にわたるべき門戸がそこに開かれる。さうして美と他の文化との相互影響、綜合的文化における美的文化の位置など、文化哲學全体の方向に指向(オリエンティール)するいろいろの問題が、次々に展開して來るのである」(3.229 f.). ここに美学は、美や芸術の内的原理の心理学的説明を越えて、文化の多様性や歴史的変貌をその課題として意識することになる⁽³⁷⁾.

『美学』出版後、阿部は、大正8年4月に『ニイチェのツァラツストラ解釋並びに批評』を新潮社から出版し、大正11年6月には『人格主義』を、同年10月には『文藝評論第一輯 地獄の征服』(ダンテ、ゲーテ、ニーチェ研究を含む)を岩波書店から出版している。大正11年から12年のドイツを中心としたヨーロッパ留学以後は、日本文化への回顧的考察がさ

らに加わり、東北帝国大学教授就任後の、昭和6年6月には『徳川時代の藝術と社會』を改造社から出版している。その後、昭和9年2月には『文藝評論第二輯 世界文化と日本文化』を岩波書店から出版している。この著作所収の〈比較文學序説〉では、理念としての「世界文學」とその契機・単位をなす様々な「國民文學」とを区別した上で、「文學における普遍性の認識を目標」(9.227)とし、「世界文學の構造と發展を明らか」(9.282)にする「比較文學」の方法について論じている。同じくこの著作に収められた〈理解と解釋〉では、リップスの「感情移入」を踏まえ、さらに、「體驗」「表出」「理解」の連関を主張するディルタイを手がかりとしながら、「余[我]」に対する「汝」としての対象の理解が試みられている⁽³⁸⁾。このような対象を「内から理解する」行為について、『美學』の〈再刊序言〉のなかでは、以下のようにまとめられている。「内から理解するとは、分析して云へば二重の作業を含有する。一つは対象の中に潛入して、対象の内からこれを理解することである。もう一つは私自身を琢磨して、私自身の内に対象解釋の根據を確かめることである。かういふ二重作業によつて、我らの内からの美學は次第に成熟して行くであらう」(3.229)。阿部における「内からの美学」は、感情移入から理解・解釈へとその重点を移して行ったが、「内からの理解」とは対象の内部からの理解と内なる人格の陶冶とを称揚するものであり、やはりそれは「人格主義」に基づく美学なのである。

その後、当時の日本の国粹主義化の高まりのなかで、昭和13年12月には『日本の文化的責任』が文部省教學局から出版された。第二次大戦後の昭和28年9月には、『點描 日本文化』(戦時中の『萬葉集』の文化的背景の研究を含む)が角川書店から出版されている。阿部は、『人格主義』のなかで、「国家」を否定する「世界[市民]主義(コスモポリタニズム)」に反対して(6.129)⁽³⁹⁾、「我らは更に全力を盡して日本の文化を向上させることに務めなければならない。單に世界の文化を一般的に進歩させることに務

めるのみならず、むしろ世界の文化を進歩させるために、日本の文化を進歩させなければならない」(6.152)と主張しており、阿部の日本文化への関心は、偏狭な国粹主義に基づくものではなく、「内からの改革」であるところの人格主義の文化哲学的な実践であった。

結 び

大正6年の『美學』の初版に際して付された〈凡例〉のなかで阿部次郎は、読者に対して「かくのごとき不完全なるものを提供し得るにすぎなかったことを恥づる。幾年かの後もし再び純粹に自分自身の美學を書く機会に遭遇したならば、今日の罪はこれをその時に償ひたいと思ふ」(3.236)と記している。しかし、「純粹に彼自身の美學」は遂に書かれずに終わった。その一つの要因として、感情移入美学が、相対的で批判的検証の対象となる心理学的美学の一理論としてではなく、倫理と美との融合を説く人格主義の美学として、一個の完結した世界観と捉えられていたことが挙げられる。数多くの文献を渉猟し、感情移入以外にも多くの理論に精通していたにも拘わらず、阿部が感情移入に代わる美学説を呈示できなかったのは、多様性を目指す教養主義と統一的な人格主義との間で、彼が動揺していたが故であろう。教養主義者としての阿部は広く文献を渉猟しつつ知識を獲得するが、人格主義者としての阿部は美と倫理とが融合する一つの真理を墨守する。阿部にとってリップスが同時代の思想家のなかで特別の存在とみなされたのは、彼の理論の故というよりはむしろ人格の故にであった。理論は批判し得るが、人格は批判できない。然るに、感情移入美学は美的対象を人格とみなす人格主義の美学である。もしも真理が、単なる理論にとどまらず人間にとって生き方を示すものであるならば、人格主義は、生き方の指針として普遍の真理である。一つの理論が生き方を示す世界観として捉えられるならば、もはや別の理論は必要ない。このように阿部にとって感情移入の美学は、心理学的美学としては相対化される

としても、人格主義の美学としては絶対的な位置を占めていたのである。

『美學』出版後、彼の「内からの美学」への関心が、感情移入からディルタイ、文化哲学へと推移したのは上に見たとおりであるが、その関心を彼自身の美学へとまとめ得なかった外的事情について、〈再刊序言〉では、以下のように述べられている⁽⁴⁰⁾。「私はこの著を世に送って六年後、大正十二年の秋から東北帝國大學の人となつて、昭和二十年春停年退職するまで二十三年間、その美學講座を擔任してゐた。しかし自己の淺學と未熟とを意識するとき、私は最初から自分の計畫を立てて自分の美學を講義する勇氣はとても持つことが出来なかつた。私は一つは學生を裨益することが多からむことを願ふ心から、一つは私自身の獨立せる思索の準備のために、まづ先進諸家の美學體系を咀嚼紹介することによつて美學概論の講義を填め合せようとした。さうして甚だ不完全な概論をしてゐる間に任期の半ばを費してしまつた。後半期にはひつて漸く自分の組織を作ることに着手し始めたが、完成した體系を準備した上で、これを一年の講義に要約するやうなことは到底望み得べきことではなかつたから、私は大體の計畫を七八章に區別して、各學年一章づつ講義を進め、一通り各章を通過した後に、最後に全體を一年に要約した通觀の講義をして、それで停年を迎へようと思つてゐた」(3.224)。「しかしそのころから世界情勢の不安は高まつて」いき、「日支事變から太平洋戦争へ」、「さうして戦争の末期に近づくに従つて、學生も教師も、落ちついて學問に没頭することはとても許されぬやうな窮迫状態に追ひおとされた」(ibid.)。「このやうな不安な状態にゐてしかも一日でも勉學の時間を延ばさうとして出席してゐる學生の顔を前にしながら、自分ばかり一年計畫の講義を悠々として進めて行くことは情において忍び難いところ」であり、「私はこれらの不運な學生のために、次回は出られなくとも一つの纏りのあるやうな講義、戦地にあつても何か思ひあたるやうな餞別講義を行はうとした」(3.225)。「一回の講義が一つの圓を描いて完結し、幸にして來週もまた教場で逢ひ得るならばそのとき

に又一圓を描いてその先を展開して行く」ような「螺旋講義では、一章に一年を費し、一巡に七八年を要するやうな學問上の計畫は實現し得べくもない。かくて全世界を罩める戰塵漠々の間に、最初の計畫の半分も遂げずに、私の大學生活は終つたのである。さうして停年後の静かな、集中した勤勞の生活を私の老病が妨げる。私は私の計畫をたゞ後に來る人々の宿題として残すより外途がなくなつてゐるのである」(ibid.).

このような事情で独自の美学の完成を諦めざるを得なかった阿部の晩年は、以下のものであった。阿部は、昭和 16(1941)年 12 月、日本學術振興會が主催する日本古典英訳小委員會のために上京した際に、眼底出血を伴う脳溢血で倒れた。その後、白内障も患ってほぼ失明状態に陥り、さらに脳軟化症も発症した。闘病は実に十八年に及び、昭和 34 年 10 月 20 日、七十六年の生涯を閉じた。晩年の悲願であった〈阿部日本文化研究所〉は昭和 29 年に開設され、6 月 5 日の古稀の祝典を兼ねた開設式典に病をおして出席した阿部は、もはや短い答礼のスピーチもかなわぬほど衰弱しており、涙を流しながら出席者と握手することしかできなかった。この式典が公の形での知友との訣別の場となり、日本文化史研究の課題は後生に託されることとなった。個人の力で設立されたこの異例の施設は、昭和 39 年に東北大学に移管された。昭和 35 年から 41 年にかけて、東北大学の同僚であった小宮豊隆および弟子たちの編集による『阿部次郎全集』(全十七卷)が角川書店から刊行された。彼が遺した唯一の『美學』は、出版社を勁草書房に代えて改版・増刷を重ね、彼の死後なお二十年以上、また、『合本 三太郎の日記』は角川書店から再刊、文庫版も出され、それらは彼の死後三十年以上にわたって版を重ねた。

註

- (1) 角川書店『阿部次郎全集』(昭和 35~41 年刊)第十七卷所収の〈年譜〉(pp. 457-493)を参照。

- (2) () 内の数字は、角川書店『阿部次郎全集』第一巻 13 頁からの引用を示す（以下同様）。
- (3) 「第貳」出版後にそれと区別するため「第壹」と呼ばれた。なお、[] 内は論者による補足（以下同様）。
- (4) 東西にわたる広範な文化研究への関心は、阿部と同じく、大正から昭和にかけて「教養主義」的傾向を代表する和辻哲郎とも共通するところである。阿部は、大正 6 年 5 月に、自らが主幹となり、和辻哲郎、石原 謙、小宮豊隆、安部能成を同人として雑誌『思潮』を創刊し、岩波書店を通じて発行した。しかし、この雑誌は大正 8 年 1 月號をもって休刊となり、その精神は、大正 10 年に阿部を除く形で和辻を編集責任者として創刊された岩波書店の雑誌『思想』に引き継がれ、いわゆる「岩波文化」が形成されてゆくことになる。
- (5) 引用は、三木 清『読書と人生』（新潮文庫、昭和 49 年刊）に拠る。
- (6) 引用は、唐木順三『新版 現代史への試み』（筑摩叢書、昭和 38 年刊）に拠る。
- (7) 『三太郎の日記』とその教養主義に対する批判的な評価としては、他に、上山春平『日本の思想——土着と欧化の系譜』（サイマル出版会、1971 年刊）第二部第二章〈阿部次郎と大正教養主義〉、等が挙げられる。
- (8) 阿部自筆の〈年譜ノート〉の〔明治〕四十二年の項には「四月 第二回美學會幹事 / リップスの美學を読み始む」とある (17.516)。
- (9) 同文館『哲學大辭書』におけるその他の「美學」に関する項目の執筆者は、大塚保治、乙骨三郎、生田弘治（長江）、菅原教造であるが、主要な項目はほとんど阿部が担当している。なお、大正 15 年には『哲學大辭書「追加」』が出版されたが、これに阿部は関与していない。
- (10) 「象徴主義」項目は、分担執筆の形になっているためか、『阿部次郎全集』（第十七巻）には収録されていない。
- (11) 井上政次による角川書店『阿部次郎全集』第十七巻末尾の〈辭典項目〉についての〈解説〉による。
- (12) 阿部は、〈美學史〉項目の末尾第九節「日本に於ける美學思想」において、明治末期の日本における美学研究の状況を、西洋美学研究の状況、美学をめぐる論争、諸大学の美学講座に即して、簡潔にまとめている。阿部が美学研究を始めたころの状況について興味深い内容を含んでいるため、本註および註 (13) (14) において、若干の知見を補いながら、それについて紹介する（引用は『阿部次郎全集』第十七巻による。なお / は改行を示す（以下同様））。「日本に於ける美學思想の發展は未だ學者の精細なる研究を経ざれど

も恐くは顯著なる美的考察と其歴史的連續的發展とを發見するに難かる可し。……美學思想の形を成すに至りたるは西洋學術文藝を輸入したる以来のこととするも妨なからむ。 / 明治に入りて夙く佛蘭西の Véron: L'Esthétique (1878) を翻譯せる中江篤介 [兆民] の『維氏美學』あれども顯著なる影響を見ず。明治二十年代の末に至りてハルトマンの美學一般に信仰せられたり。ハルトマンの紹介者としては、其『美學』を摘要して『審美綱領』を著したる森林太郎 [鷗外] あり。此人には更にフォルケルトの Aesthetische Zeitfragen を抄せる『審美新説』とリイプマンの著 [Zur Analyse der Wirklichkeit] を譯せる『審美極致論』とあり。高山林次郎 [樗牛] 亦『近世美學』を著してキルヒマン、ハルトマン、スペンサー、グラント・アレン、マーシャル等の説を略述せり。近時に至りてはフォルケルト、リップス等の書新たに讀まるるに至りたれども其研究は盛なりと云ふを得ず (17.359 f.)。阿部は、明治期の西洋美学の移入研究の状況について、中江兆民、森 鷗外、高山樗牛によって西洋美学の文献が紹介され、最近はフォルケルト、リップスが読まれるようになってはいるが、日本における美学研究はまだ盛んであるとは言えないとし、後には、彼自身がリップスの美学について抄訳紹介を行っている (本論参照)。

因みに、明治 32 年刊の高山 (林次郎) 樗牛の『近世美學』 (博文館『帝國百科全書』第三十四編) は、上編「美學史一斑」で、美学の定義、西洋における古代ギリシア以来ヘーゲルまでの美学の展開を紹介した後に、下編「近世美學」において、キルヒマン (J. H. von Kirchmann) の「感情美學」、ハルトマン (E. von Hartmann) の「純理哲學的美學」 (これについては批判的検討を含めてきわめて詳細に)、さらに、スペンサー (H. Spencer) の「進化論的美學」、グラント・アレン (Ch. Grant Blairfindie Allen) の「生理的美學」、マーシャル (H. B. Marshall) の「快樂論的美學」について紹介している (博文館『改訂註釋 樗牛全集』第五卷 (昭和 5 年刊、復刻版: 日本図書センター、昭和 55 年刊) 所収)。

- (13) 続いて阿部は日本における美学論争を取り上げる。「日本人の自發的思索としては僅に藝術批評家の間に闘はされたる論戦あるに過ぎず。森林太郎と坪内雄藏 [逍遙] との『沒理想論』、坪内雄藏と高山林次郎との『歴史美論』、島村龍太郎 [抱月] の『觀照と實行との關係論』等を其重なる者とす。島村龍太郎は又『新美辭學』の著者としても注意す可し」 (17.360)。E・V・ハルトマンの立場に立つ鷗外と逍遙との間の「沒理想論争」、逍遙と樗牛との間の「史劇・歴史画論争」はよく知られたところであるが、島村抱月の「觀照と實行との關係論」とは、おそらく「自然主義」をめぐる論争を指すので

あろう。明治における美学論争を紹介するなかで「自然主義」の語が出てこないのは意外な印象を覚えるが、抱月には〈藝術と實生活の界に横たはる一線〉と題された評論（『早稲田文學』明治 41 年 9 月）がある。また、高田早苗の『美辭學』（金港堂、明治 22 年刊）を承けた抱月の『新美辭學』（早稲田大學出版部、明治 35 年刊）の第三編には心理学的な「美論」が置かれている。

- (14) さらに、美学の講座が設けられた東京および京都大学における講壇美学の展開が言及される。「東京帝國大学の太田保治、京都帝國大学の深田康算等には未だ其組織を示せる著書なきも其小論文によりて特色ある美學的考察あるを示せり」（17.360）。明治期の諸大学における美学の講義は、ケーベル、フェノロサ等の御雇い外国人による時期を経て、明治 20 年代半ばからは、東京専門学校（早稲田大学）では大西祝（操山）、太田（小屋）保治、島村抱月によって、また、慶應義塾大学では森鷗外によって行われるようになった。明治 33 年（1900 年）、太田保治が東京帝國大学における初代の美学講座担当教授となり、明治 43 年、京都帝國大学美学美術史学講座教授に深田康算が就任した。
- (15) 岩波書店『哲學叢書』（続編を除く）の構成は以下のようなものである。
- （第 1 編）紀平正美『認識論』（大正 4 年刊）
 - （第 2 編）田邊 元『最近の自然科學』（大正 4 年刊）
 - （第 3 編）宮本和吉『哲學概論』（大正 5 年刊）
 - （第 4 編）速水 滉『論理學』（大正 5 年刊）
 - （第 5 編）安倍能成『西洋古代中世哲學史』（大正 5 年刊）
 - （第 6 編）阿部次郎『倫理學の根本問題』（大正 5 年刊）
 - （第 7 編）石原 謙『宗教哲學』（大正 5 年刊）
 - （第 8 編）上野直昭『精神科學の基本問題』（大正 5 年刊）
 - （第 9 編）阿部次郎『美學』（大正 6 年刊）
 - （第 10 編）安倍能成『西洋近世哲學史』（大正 6 年刊）
 - （第 11 編）高橋里美『現代の哲學』（大正 6 年刊）
 - （第 12 編）高橋 穰『心理學』（大正 6 年刊）
- （刊行年は、船山信一『大正哲学史研究』（法律文化社、1965 年刊）8 頁に拠る。）
- (16) リップスの略歴・主要著作について、大脇義一は、〈テオドール・リップス略傳、著作及びその思想〉（『心理學原論（Leitfaden der Psychologie）』（岩波文庫〔原書第三版 1909 年刊に拠る〕1934 年刊）に付された訳者による解説 pp. 9-19 [特に p. 16 ff.]）において、ほぼ以下のようにまとめている。

リップスの思想的生涯は三つの時期に区分することができる。第一期は1874年の学位論文から1890年頃までであって、この時期にはヘルバルトとヒュームの影響が著しい。彼の最初の著作『精神生活の根本事実 (Die Grundtatsachen des Seelenlebens)』(1883年, 新版1912年)にはヘルバルトの影響が認められる。また、彼はヒュームの主著“A Treatise of Human Nature”の翻訳を企てており、意識の直接の深き分析について、そこから学ぶ所が少なくなかった。とは言え、この第一期から既にリップス特有の傾向は現れており、それが『精神生活の根本事実』に示された、純粹の内省、主観的経験的基礎の上に、あらゆる方面の心的事象を記述し解釈しようとする意図である。ヒュームの『人性論』の翻訳は1895年に第一部“David Humes Traktat über Menschliche Natur. I. Teil: Über den Verstand. (Übersetzung und Bearbeitung)”, 1906年に第二部“David Hume, Traktat über die menschliche Natur. II. Teil. (Übersetzung)”が出版された。

1890年頃から1900年頃までの第二期において、彼の関心は、狭義の心理学の問題から離れて、論理学 (Grundzüge der Logik (1893, Neudruck 1912)), 倫理学 (Die ethischen Grundfragen (1899, 2. Aufl. 1905)), 美学 (Das Wesen der Tragödie (1892), Raumästhetik und geometrisch-optische Täuschungen (1897), Komik und Humor (1898), Ästhetische Einfühlung (1900), 他) に向かった。彼の美学の講義は識者や芸術家の間で評判となった。

1900年以降の第三期には、個々の問題からより一般的な問題、根本的な問題の考察に向かった。特にフッサールの『論理学研究 (Logische Untersuchungen)』(1900年)における批判は彼を強く動かし、1905年以降の著作の大部分は、彼を「心理主義」とみなす非難に対する駁論に関係しているが、特に〈内容と対象、心理学と論理学 (Inhalt und Gegenstand, Psychologie und Logik)〉(1905年)が彼の立場を明瞭に示している。彼は、論理学的合法則性と心理学的合法則性との間に厳密な区別を立て、アプリアリな法則と経験的な法則とを区別したが、純粹に客観的数学的な論理化を排斥して、論理的および経験的な合法則性を意識自身の内に捕える、すなわち意識の事実の分析によって基礎づけようとした。このような見地から彼はフッサールの現象学に対抗したのである。この時期に『心理学原論』(初版1903年, 第二版06年, 第三版09年), 『美学』全二巻(第一巻「美学の基礎づけ (Grundlegung der Ästhetik)」1903年(新版1914年), 第二巻「美的観照と造形芸術 (Die ästhetische Betrachtung und die bildende Kunst)」

1906年)が完成した。さらに1912年には〈「心理学」と「哲学」のために (Zur “Psychologie” und “Philosophie”)〉, 〈我思う故に我在り (Das “cogito ergo sum”)〉といった重要な論文が書かれた。

- (17) 阿部は、『倫理學の根本問題』の〈凡例〉のなかで、「本書は未熟なる自分の私見を述べたものではない。Theodor Lipps, *Die ethischen Grundfragen*, 2 Aufl. [1905] に據つて書いたものである。自分は絶對的に私見を混入することを避けて、ひたすらリップスの思想と情熱と感激とを生かさうとした」(3.7)と記している。実際、以下に示すように、その構成は、全十講 (Zehn Vorträge) のうちの第九講と第十講とが第九章にまとめられていることを除いて、原書に忠実に従っている。

第一章 序論——利己主義と利他主義 (Einleitung.—Egoismus und Ultruismus.)

第二章 道德上の根本動機と惡 (Die sittlichen Grundmotive und das Böse.)

第三章 行為と心情——幸福主義と功利主義 (Handlung und Gesinnung. (Eudämonismus und Utilitarismus.))

第四章 服従と道德的自由——自律と他律 (Gehorsam und sittliche Freiheit. (Autonomie und Heteronomie.))

第五章 道德的正——義務と傾向性と (Das sittlich Richtige.)

第六章 一般的道德律と良心 (Die obersten sittlichen Normen und das Gewissen.)

第七章 目的の體系 (Das System der Zwecke.)

第八章 社會的有機體——家族と國家 (Sozialen Organismen. (Familie und Staat.))

第九章 意志の自由と責任 (Neunter Vorttag: Die Freiheit des Willens. (Determinismus und Indeterminismus.) / Zehnter Vortrag: Zurechnung, Verantwortlichkeit, Strafe.)

- (18) 阿部は、リップスその人、彼の人格に対して非常な敬意を抱いており、欧州留学時の大正12年(1923年)6月にはミュンヘンを訪問し、彼の弟子であったモーリッツ・ガイガーの案内で、リップスの遺族を訪問している(『游歐雜記 獨逸の巻』(改造社、昭和8年刊)〈九、二度目の獨逸〉〈十、再會〉[角川版全集第七卷所収(7.483-497)]参照)。

しかし、一方で、阿部は、『倫理學の根本問題』の〈凡例〉のなかで、リップスの主張に対する若干の疑念を述べることも忘れてはいない。「一例を云へば自分は〈動機〉相互の矛盾と、人生の〈惡〉とについてリップスほ

ど楽天的な見解を持つことが出来ない。この問題に深入りして行くとき、自分は恐らくはリップスを通つてリップスの外に出なければならないであらう」(3.8)と。

- (19) 『人格主義の思潮』は、〈人格主義の概念〉〈自己と他人〉〈人格主義と國家主義〉〈人格の運命〉と題された四つの章に〈勞働問題一面觀〉が附録として収められている。

阿部は、『人格主義の思潮』の第一章〈人格主義の概念〉の冒頭で、「私のこの話は、リップスの考を基礎にして、それにリップスの先輩の種々の話を混ぜて、さうして、それを一度私の腹に入れて置いて、私自身の考として、皆さんの前に人格主義の思潮を申し上げると云ふやうな譯であります」(6.330)。「それでリップスの先輩と申しますと、すぐに Kant を考へない譯にいかないのであります。……カントの人格主義の考は、何と云つても『新約全書』に基づいてゐると思ひますから、カントの源として、『新約全書』の考へ方を眼中に置かない譯に行かない。途中をどんどん飛ばして云へば、『新約全書』からカントに來て、カントからリップスに來た考へ方は、私の今度の話の主なる流である。……それから、外に私が平生愛讀してゐる人たちとして、トルストイと、ニイチェと、ゲーテの話がちよいちよいはひつて参ります」(6.331)と、彼が捉えるところの人格主義の思想的な系譜を語っている。

- (20) 『人格主義』は、〈序論〉〈本論〉〈餘論〉の三編に分かれ、第一編の序論は〈理想主義〉(一、理想主義のために / 二、理想主義と現實生活)、第二編の本論は〈人格主義〉(一、人生批評の原理としての人格主義的見地 / 二、人格主義、戒律主義、主觀主義 / 三、社會生活の内面的根據 / 四、當來社會の根本原理 / 五、國家主義の解剖 / 六、人格と世界)、第三編の餘論は〈應用〉(一、大學の獨立と社會理想としてのアナーキズム / 二、思想政策について / 三、思想政策の運用について / 四、國民思想獨立の問題 / 五、人格主義と勞働運動 / 六、享樂の意義 / 七、學藝の愛と家庭生活 / 八、讀書の意義とその利弊 / 九、T 氏に答ふ)と題され、倫理学的な基本問題ならびに時事的な社會問題が論じられている。

『人格主義』の「序」において、阿部は「私はリップスの『倫理學の根本問題』に對する補説としてこの書を書いた。……リップスの倫理學を縮譯してからこのかた、私はこの書の内容をひろめることを、今日の社會に對する自分の義務と感じて來た」(6.7)。「私はリップスの倫理學を補説しようとしてこの書を書いたが、しかしそれはリップスの學説を、一つの學説として註釋するやうな動機をば全然交へなかつた。私は、私が彼の思想と共鳴する點

- に、出来るだけ生きた表現を與へるために、自分自身の信じ得るところを自分自身の言葉で語ることが主要の關心とした」(6.9 f.) と、彼のこの著作に対する執筆態度を述べている。
- (21) 人格と物との端的な區別について、阿部は、「人格と物との差別は畢竟 to be の主體と to have の對象との差別である。私たちはある者であり何物かを持つ。私たちの持物を私たちの精神的屬性と區別するところに、人格の概念の第一の標識は成立するのである」(6.50) と述べている。
- (22) リップスが主張する人格価値の三要素（豊富、力、統一）について、阿部は、岩波哲学叢書版『倫理學の根本問題』の「175-181 頁（理想的人格）」[第5章〈道德的正——義務と傾向性と〉の末尾、全集版では 3.114-118] の指示を註記している(6.83)。なお、同書 59 頁[全集版 3.44] も参照。
- (23) 阿部は、国家主義に対して、以下のような三種を區別している。「第一の國家主義は、國家の特質なる強制を絶對化するものである。政治上の意味における absolutism である。國家の權力があらゆる意味において絶對なことを主張して、その命令の内容如何を問はず、臣民に絶對服従を強ひ、これに対する批評を拒まんとするものである。/ 第二の國家主義は、國家と云ふ社會の福利を絶對化するものである。國家の福利を人生最上の理想として、これに矛盾するものを絶對に排斥せんとするもの、換言すれば、國利民福主義もしくは富國強兵主義のごときものである。/ 第三の國家主義は、所屬國家の繁榮を絶對理想として、他の國家に對する侵略もしくは掠奪のごときも、所屬國家の繁榮のためには意とするに足らざることを主張するもの、換言すれば、帝國主義の最も純粹な形がそれである」(6.128)。第二の國家主義も否定されるのは、阿部が「福利は福利なるがゆゑに、無條件に價值あるものと云ふことは出来」ず、「福利の價值あるはそれが人格の價值を増進するところ」にあり、「福利の價值を決定するは、これを使用する人格の如何による」(6.136) と考えているからである。
- (24) 阿部は、労働運動に対して、「人格主義」の立場から以下のように述べている。「人格主義の立脚地から見れば、資本を擁する者必ずしも資本主義者でなく、無産者必ずしも労働主義者ではない。所有を唯一の關心とするものは……ことごとく資本主義者である。白き手の資本主義者と荒き手の資本主義者と、現在資本を擁する資本主義者と資本家に成り上らうとする資本主義者と——この二つの階級の争は、その道德的意味から云へば、白き手の資本主義者と白き手の資本主義者との競争と實質上何の相違もないのである。もし労働運動とは白き手の資本主義者と争つて天下をとらうとする、荒き手の資本主義者の押したてる旗印にすぎないならば、それは結局資本主義道德宣傳

の運動である。この労働運動がひろまればひろまるほど、益々資本主義根性がひろまって行くであらう」(6.256)。「われわれとボルシェヴィズムとは労働者の概念を異にする。われわれのこゝにいふ労働者とは、それが物質的のものであれそれが精神的のものであれ、それが経済的報酬を伴ふものであれ伴はぬものであれ、およそある価値の創造を生活の中心義としてゐる人の一切である。したがって學者や藝術家等のいはゆる精神労働者は勿論、事業を計畫する企業家もまた労働者である。所有と享樂とを根本義として生活する資本主義者——必ずしも資本家ではない——に對して、価値の創造を根本義として生活する者はすべて労働者である。人格主義はこの意味においてすべての人を労働者とせむことを欲する。この意味において労働者の國を創造せむことを欲する」(6.260)。

- (25) 〈人格主義、戒律主義、主觀主義〉(『人格主義』第二編所収)のなかの「赤十字」発言の意図を明確にすべく、阿部は、〈人格主義の赤十字的態度〉を《改造》(大正10年3月号)に発表した(後に『北郊雜記』(改造社、大正11年刊)に収録、角川版全集では第七卷(pp. 9-16)に所収)。そこで「人格主義」は「労働運動の中に混入せる憎惡の汜濫と復讐心」とに「挑戦して、これを内部から淨めむことを欲する」(7.11)とされ、また、眞の「赤十字の使命」は「あるまじき戦争を防止する運動の戦事における繼續」であり、「一つの戦における敵味方のいづれにも與せざることによつて、あるまじき戦そのものに對して挑戦する」(7.12)ことであると規定される。

ところで、大正11年には、ロシア文学者片上伸の実弟で、まだ東大倫理学科の学生であった^{たけのうちまさし}竹内仁が、〈リップスの人格主義に就いて——阿部次郎氏のそれを批評する前に〉(『我等』2月号)、〈阿部次郎氏の人格主義を難ず〉(『新潮』2月号)において、「赤十字的態度」をとる阿部の人格主義を「ブルジョアジーに彼等の保守主義の好個の口實を提供する」(後者の第一節)ものと批判し、人格の陶冶を待つのではなく、社会制度を変革する必要を主張した。これに對して阿部は、竹内の批判のうちの後者のみを参看し得たことをことわって、〈竹内[T]氏に〉(『改造』3月号、単行本の『人格主義』への収録に際してイニシャルに変えられた)という反論を書いた。これを受けて竹内は、〈再び阿部次郎氏に〉(『新潮』4月号)で再反論した。両者の対立は、個人の道德と公的な制度のどちらを重視するかという社会觀の対立であり、当然ながら論争は平行線に終わった。因みに、氣鋭の論客として将来を期待された竹内は、その情熱を論評にも社会改革にも活かすことなく、同年11月、婚約の一方的な解消を恨んで婚約者の両親を刺殺した後、縊死した。(『竹内仁遺稿』(イデア書院、昭和3年刊〔復刻版：湖北社、

1980年刊]) 参照)

- (26) リップスの『美学：美と芸術の心理学 (Ästhetik. Psychologie des Schönen und der Kunst.)』(第一部 1903 年, 第二部 1906 年) は, 以下のように構成されている.

第 I 部 美学の基礎づけ (Grundlegung der (Ästhetik)

序論 (Einleitung)

第 1 篇 一般的美的形式原理 (Die allgemeinen ästhetischen Formprinzipien) (第 1~6 章)

第 2 篇 人間と自然物 (Der Mensch und die Naturdinge) (第 1~9 章)

第 3 篇 空間美学 (Raumästhetik) (第 1~5 章)

第 4 篇 韻律 (Der Rhythmus) (第 1~9 章)

第 5 篇 色, 音および語 (Farbe, Ton und Wort) (第 1~6 章)

第 6 篇 美の様態 (Die Modifikationen des Schönen) (第 1~9 章)

第 II 部 美的観照と造形芸術 (Die ästhetische Betrachtung und die bildende Kunst)

第 1 篇 美的観照と芸術作品 (Die ästhetische Betrachtung und das Kunstwerk) (第 1~4 章)

第 2 篇 造形芸術 (Die Bildkünste) (第 5~9 章)

第 3 篇 空間美学の一端, 空間芸術の最も単純な物質的形式, 先取り
(Ein Stück Raumästhetik. Einfachste körperliche Formen der Raumkünste. Eine Vorausnahme) (第 10~15 章)

第 4 篇 空間芸術の諸形式 (Formen der Raumkünste) (第 16~19 章)

第 5 篇 工芸作品 (Das technische Kunstwerk) (第 20~25 章)

第 6 篇 装飾と修装的造形芸術 (Ornament und dekorative Bildkunst)
(第 26~29 章)

なお, 和訳には, 以下のようなものがある.

リップス『美學汎論』[第 I 部] 稲垣末松 訳 [講述] (洛陽堂, 大正 10 年 (1921 年) 刊) [『美学』第 I 部全 6 篇のなかの第 3・4・5 篇を欠く]

リップス『美學各論』[第 II 部] 稲垣末松 訳 (洛陽堂, 大正 11 年 (1922 年) 刊) [『美学』第 II 部全 29 章のなかの第 19 章を欠く]

リップス『美學大系』[第 I・II 部] 稲垣末松 全訳 (同文館, 大正 15 年 (1926 年) 刊) [上記二冊の増補版であるが, 第 II 部については, やはり第 19 章を欠く]

テオドール・リップス『美學』[第 I 部] 佐藤恒久 訳 (春秋社『世界大思想全集』第 102, 103 巻, 昭和 11 年 (1936 年) 刊) [『美学』第 I 部第 2 篇

の第9章を欠く]

- (27) リップス『心理学原論 (Leitfaden der Psychologie)』(第三版 1909 年刊) は、以下のような構成をとっている。
- 第1編 序論 (Einführung) (第1～3章)
 - 第2編 要素と根本法則 (Elemente und Grundgesetze) (第4～7章)
 - 第3編 統覚 (Apperzeption) (第8～10章)
 - 第4編 判断 (Das Urteil) (第11・12章)
 - 第5編 認識と誤謬 (Erkenntnis und Irrtum) (第13～15章)
 - 第6編 意志 (Der Wille) (第16～18章)
 - 第7編 感情 (Das Gefühl) (第19～21章)
 - 第8編 特殊な心的状態 (Besondere psychische Zustände) (第22～24章)
- (28) 『美学 (現代の文化) (Aesthetik (Kultur der Gegenwart))』について、論者はこの著作について未見であり、ここに阿部の『美學』との対応関係を指示することはできない。
- (29) 阿部は、「感情移入」を根本原理としたリップスの美学の偏りを補うべく、『美學』の末尾に〈餘論——残されたる問題〉として、〈一、美學の方法〉〈二、藝術製作の心理〉〈三、個々の藝術について〉〈四、社會學的、民族心理的研究〉〈五、美學史〉〈六、一般美學について (上記以外)〉と主題別に分類された参考文献表を掲げている (3.446-450)。そこに挙げられた諸文献は、阿部および大正期の日本の美学研究の傾向を示していて興味深い。なお、大西克禮の『美學原論』は、阿部の『美學』の出版後、同じ大正6年5月に不老閣書房から出版されたものであり、これへの言及は、『美學』が関東大震災後の大正13年に改版された時に補われたものである。
- (30) 以下の「まとめ」に際しては、山川淳次郎による〈感情移入〉項目 (弘文堂『美学事典』(竹内敏雄編) 増補版, 昭和49年刊) のリップスに関する記述 (pp. 73-75) を参照した。
- (31) リップスの感情移入美学は、美的対象を一種の「人格」(「自由市民」) とみなす Fr. シラーの美学と本質的な共通性を有している。シラーの美学については、拙稿〈「現象における自由」と「象徴としての美」——シラーにおけるカント美学の受容とその展開〉(美学会編『美學』154号 (1988 秋) [1988 年9月] 所収 (pp. 36-47)) を参照。
- (32) この〈再刊序言〉のうち純粹に旧著の再刊に関わる部分を除いたものが美学会の機関誌『美學』第3号 (昭和25年) に〈感情移入美學について〉と題して掲載された (pp. 73-79)。なお、昭和31年には、勁草書房版でも改版が

行われた。

- (33) リップスの〈我思故我在 (Das “cogito ergo sum”)〉について、阿部は自ら抄訳を行っている(『思潮』(大正6年10月号)に掲載、後に『學藝論鈔』(下出書店、大正11年刊[後に、改造社、大正13年刊])に所収)。
- (34) 「内からの美学」は、その方向性において「現象学的美学」と重なりとされるが、阿部は、以下のように述べるだけで、ここで問題となっているような心理学に代わって、現象学が美学の基礎学となり得るかについては明確に述べていない。「現代の美學中その志向に於いて我々の内からの美學と最も接近するものは現象學的美學である、〈事柄そのものへ!〉(Zur Sache selbst!)といふその標語は、我らの美學にもまた掲げ得るところである。たゞ現象學的美學が果してこの標語を質實に純粹に追求しつゝあるか、それは綱渡りに類する危き論理的遊戯に陥る虞がないか、それが批評的検討を要する點であらう。現象學的美學については、日本語に、大西克禮君の好著がある。私は安んじてこの書を推薦して現象學的美學の談を省略する」(3.229)。因みに、ここで指示されている大西克禮の著作は『現象學派の美學』(岩波書店、昭和12年刊)と考えられる。
- (35) 阿部とディルタイとはゲーテへの関心を共有している。阿部は「感情移入美學の後に、私の注意はディルタイに向った。恐らくディルタイ自身、豊かにゲーテの水に浸つてゐたであらうが、その傾向を等しくするまゝに、私の小さい笹舟もまたディルタイに従つてゲーテの流れに身を委ねた」(3.228)と述べている。
- (36) ゲーテの『ファウスト』における「母たち」の国を、ここでは比喩的に「心の根底」の意味に用いている。「母たち」については、『ファウスト』第II部6212~6306行を参照。
- (37) 阿部の関心が、感情移入から表現、さらに文化哲学へと推移しつつあることは、大正14年8月に島田で三日間にわたって行われた講演《藝術の本質》(全集第十七巻(pp. 217-283)所収)にも示されている。因みに、この講演は、〈緒言〉〈一、藝術衝動〉〈二、藝術表現〉〈三、藝術の文化的意義〉から構成されている。
- (38) 〈理解と解釋〉の〈五、後語〉では、「この講述がディルタイとリップスの影響の下にあることは自明である」(9.371)とされ、そして、さらなる考察のためには、ディルタイの『精神科学における歴史的世界の構成 (Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Gesteswissenschaften)』の「就中、遺稿の部分」の精読が勧められている(9.370)。さらに、「〈余と汝と〉の問題については西田氏を、理解と解釋の意味の決定についてはハイデッ

ガーを考慮の中に置いた」(9.371)と記されており、西田幾多郎の〈私と汝〉(『無の自覺的限定』(1932年刊)所収)とハイデッガーの『存在と時間(Sein und Zeit)』(1927年刊)とが参照されている。

- (39) 「国家」を否定する「世界[市民]主義(コスモポリタニズム)」に反対する阿部は、「國家は果してどこにその存在の積極的理由を持つてゐるか」という問いに対して、以下のように答えている。「私はこの問題に對して、第一に、現在の問題として、國家の強制力は人類の幸福のために必要である、第二に、永遠の問題として、國家の成員を結合することによつて成立する民族的社會は、人類全體の社會を組織する一つの單位として必要である、と答へたい。我らは世界全體に對する義務を破ることなしに、むしろ世界全體に對する義務を全くするために、この社會を愛しなければならない。父母や朋友や妻子を愛すると同様に、積極的にこの國家を愛しなければならない。さうして我らが父母妻子を正しく愛することによつて、人類社會に對する義務を破ることがないと同様に、國家を正しく愛することによつて、世界に對する義務を破る理由もまたないのである。國家を愛することは人類の世界的結合を妨げるといふのは、利己的國家主義のことであつて眞正なる愛國の事ではない。我らはかくのごとき愛國によつて國家存在の積極的意義を果させなければならないのである」(6.149)。
- (40) 昭和24年(1949年)8月27日の東北大学での〈還暦祝賀記念會における挨拶〉(当初『阿部先生の横顔』(昭和26年12月刊)、後に角川版全集第十七卷(17.202-206)所収)でも、阿部は、晩年の研究上の三つの関心(美学、ゲーテ、日本文化史)およびその遂行を妨げる身体的事情について述べている。特に、美学研究については、以下のような形で、研究の遂行・発展を後生に託している。「僕のメトードは“von innen heraus”といふメトードである。上からの美學でもなく、下からのでもなく、中からのメトードをもつた美學が成立する。これを諸君の中の誰かに繼承して物にして貰ふことを期待してゐる。それが一つ。次に藝術の文化的特質であるが、凡ゆる文化は孤立したものではなく、互ひに關係し影響し合つて、全體として發展して行くので、藝術といふ文化の特質も、相互關係において見なければならぬ。Darstellungの概念を、さういふ意味で追求する必要がある。藝術のDarstellungが、昔から言はれてゐることだが、それ自身の世界を作り上げるとともに、宗教、思想などと一緒になり、それらの文化仲間と影響し合つて動き流れて行く。さういふ意味で、Darstellungの概念を掘下げることは、これは先輩も多くはやつてはゐない。それを自分の仕事としてゐるが、諸君の美學研究の中に採り入れて、深く探求して行つて欲しい」(17.203 f.)。